

平成 23 年度 看護系学会等社会保険連合研究助成 研究報告要旨

※2500 字程度

高齢者ケア施設における看取りを支援する診療・介護報酬の検討 - 特別養護老人ホーム（特養）における看護・介護職員の看取り体験に焦点をあてて -

【背景と目的】

近年、臨死期において必ずしも入院を必要としない、あるいは希望しない高齢者および家族が増加している。高齢者ケア施設は、福祉制度に拠る施設であるという事情から、家族調整・対応を含め臨死に対応できる十分な体制がないにも関わらず、対応を余儀なくされている現実がある。そのため、本人・家族にとって望ましい最期を施設で迎えるために必要な支援の実態を調査し、質的なメリットとコストバランスを検討する必要があると思われるが、ほとんどなされていないのが実情である。特に、特別養護老人ホーム（特養）における看取り数は年々増加しており、それに伴い入居者とその家族の安寧で満足のいくケアへのニーズも高まっている可能性が大きい。施設での看取りは在宅と比べ、介護職員・看護職員がより家族の役割を担うと同時に、家族との調整が求められることが特筆される。

本研究では、特養における介護職員・看護職員に対する看取り体験の聞き取り調査から、特に家族対応へのやりがいと負担および施設での看取りに要する条件について明らかにすることを目的とする。

【方 法】

1. 対象：対象施設は神奈川県S市、京都府K市特養の各々1施設であり、対象者は各施設の長が推薦した勤務経験5年～40年の介護職員10人（男性8人、女性2人）および看護師6人（女性6人）、計16人であった。対象者の看取り経験数はS市施設で8件（最頻値）、K市施設で21件（最頻値）であった。
2. 期間：調査期間は2012年2月11日～3月3日、インタビューに要した時間は、平均81.2分（最長105分、最短52分）であった。
3. インタビュー内容：エピソード想起型の3つの質問項目であった。具体的には、これまでの施設における看取り経験を振り返って最も印象に残った良い体験、負担であった体験およびその理由、ならびに、これらの経験を踏まえて、より良い施設看取りを可能にするための必要な条件についてであった。
4. 分析方法：16人へのインタビューについてそれぞれ逐語録を作成し、前述の3つの内容についての記述を抜き出し、表に整理した。これらをText Mining Studio 4.0（数理システム）を用いて単語頻度分析、係り受け頻度分析を行った。また、家族対応の注目分析は「家族」との共起関係および係り受け関係を図に可視化した。
5. 倫理的配慮：本研究は研究代表者の所属機関の倫理委員会の承認を得て、施設長およびインタビュー協力者への口頭と文書同意を得た。

【結 果】

1. 単語頻度分析結果：全体として良い体験では、使用頻度の高かった単語の順に「利用者」（52）、「家族」（41）、「看取り」（38）であり、負担だった体験では、「利用者」（39）、「家族」（33）、「看取り」（33）であった。
2. 係り受け頻度分析結果：良い体験では、係り受けの係り元単語と係り先単語の組み合わせは、頻度の多い順に「看取り－経験」（7）、「利用者－亡くなる」（5）、「家族－話す」（4）であり、負担であった経験

では、「面会—来る」(5)、「家族—来る」(4)、「家族—話す」(4)であった。

3. 注目分析結果：良い体験の結論単語を「家族」にした結果、前提単語はルール数の多い順に「良い」(17)、「話す」(8)、「感謝」(6)、「お言葉」(6)であった。このうち頻度の高い順に原文を抜粋すると、「家族のありがとうという言葉に救われた」(30代男性介護職員)、「家族にすごく感謝され、良い仕事をしているな、『うちのおばあちゃん、ここで生活できて良かったです。成仏できます。』と言われると、そんなに感謝されることなのだど気持ちが変わった」(20代男性介護職員)、「看護師が介護職員に指導し、家族のニコニコされる姿に触れた」(50代看護師)、「看取りは、より家族と親身な話ができるようになり、家族と話す機会も増え、家族もいろいろ相談してくれるようになり、信頼関係が強くなった気がする。」

(30代男性介護職員)等であった。負担であった経験では、多い順に「来る」(10)、「話す」(8)、「施設」(8)、「面会」(6)、「対応」(6)であった。原文抜粋では頻度の高い順に、「家族の不満、クレームが改善されないまま家族に会うのが嫌です。家族の面会で、何を話して良いか分からない。看取りで、元気でずとは言えない。調子が悪いです、もどうか。家族に食事量とそれがどれだけ減ってきたかくらいの話しかできない。もしかしたら、看取りの本人と同じくらい家族にも気を遣うかもしれない。何を家族と話してよいか分からないが、沈黙は嫌なので、こんな状態ですということは話す。」(20代男性介護職員)、「家族にとって看取りは初めてで、情報をもっと伝えて、説明をしっかりしていかなければと思う。最期の方は、どんどん食べられなくなり、一口がもう難しいラインがあり、私たちが口からは難しいという見解があっても、家族はやはり食べさせたい気持ちがあり、面会に来た時に持ってきたものをあげたりし、その危険さが分からない。家族の思いで『食べてほしい、これを食べなかったら死んでしまう』気持ちになるので、誤解を招かないようにきちんと説明をしている。」(30代男性介護職員)等であった。

【考 察】

単語頻度分析、係り受け単語頻度分析から看取りの経験は「やりがい」にも「負担」にもなっている。利用者や家族からの感謝の言葉が「やりがい」となる一方で、家族からの不満やクレームは「負担」として重くのしかかっている。特に介護職員の方は「面会」時に「家族」の施設に対する不満への対応や、面会時のコミュニケーションに困難を感じており、看護師は介護職員へ「死」の医学的な知識や介護技術を指導することが主な「負担」の内容であったが、その指導が介護職員の理解を深め技術を向上させる「良い経験」となっていた。介護職員は、より良い看取りに対して看護師の助言等を必要としていることも示唆された。より良い看取りのために、今以上に看護師が介護職員の家族との関わりを支援する技術と体制を確立してゆく必要があるのではないかと。

看取りの経験は、家族からの感謝の言葉や気持ちによって関わる者のマインドにプラスに影響し、介護職員による夜間の急変対応や食事介助などについての家族の意見の食い違いの経験はマイナスに影響する。よって、看護職による介護職への夜間急変、食事介助等のサポートや技術指導、家族関係調整は、施設の看取りをより楽に支援できる体制に寄与する可能性がある。今後、どの程度の費用対効果があるか、他の施策との比較も含めて検討していく必要がある。

以 上